

単元名:多文化理解 ～ルーツを見つめる・ルーツについて考える～		
氏名:住吉 清夏	学校名:大阪府立東淀川高等学校	
担当教科:日本語	実践教科:異なる2クラスで開催 学校設定科目 ワールドスタディ / 時事日本語	
時間数:2時間 / 5時間	対象学年:3年 / 2年	人数:33人 / 10人
使用教材:オリジナル作成プリント・自作スライド		

【実施概要】

<p>【1】単元の目標</p> <p>本単元では、2クラス合同のハイブリッド授業として、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界の事柄について学ぶ日本人生徒向けクラス「ワールドスタディ」 ・外国にルーツを持つ生徒(以下、ルーツ生)のクラス「時事日本語」 <p>の両者を対象に授業を行う。</p> <p>相手の背景を知ることによって心の距離が近づくことをテーマとし、次の姿をめざす。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見た目や名前にとらわれず、相手の背景を尊重する ・違いを知り、受けとめることで、やさしい世界を広げる ・共通点や夢を見つけ、お互いの世界をつないでいく <p>授業者がペルーでの日系人との出会いを通して感じたことを提示し、異文化理解を深める。</p> <p>ルーツ生に対しては、自分のルーツを見つめ、自信をもって語る場とし、日本人生徒に対しては、ルーツ生とつながる経験を通して、今後の多文化共生社会において「自分の行動が誰かを助けることにつながる」ことに気づかせることを目的とする。</p>		
<p>【2】単元の評価基準</p>	(ア) 知識・技能	日系社会に関する知識をもとに、相手の背景理解を深めている。また、ルーツ生の背景には多様性があることを理解している。
	(イ) 思考・判断・表現	ケーススタディを通して、身近にいるルーツを持つ生徒に対して、自分の考えを根拠をもって表現している。
	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度	多文化共生について、自分の知識や行動が多文化共生社会の中でのような影響を与えるのかを自分事として捉え、考えようとしている。さらに、授業で得た気づきを日常生活や人間関係に結び付け、「自分には何ができるか」「相手に寄り添うためにはどう行動すべきか」を主体的に模索しながら学習に取り組んでいる。
<p>【3】単元設定の理由</p>	<p>1.生徒観／学校の概要</p> <p>本校は、日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒を対象とした入学者選抜を実施している高校であり、現在3学年で48名、国籍は10か国にのぼる。日常の学校生活ではルーツ生と一般生徒が同じ教室で机を並べて学ぶ時間があり、肌の色や服装(ベール着用など)、宗教上の食文化や祈りの時間といった違いを自然に受け入れる環境が形成されている。しかし、互いの文化や生き立ちを深く語り合う機会は必ずしも多くなく、表面的な理解にとどまっているのが現状である。</p> <p>2.教材観</p> <p>授業者は教師海外研修への参加を通して日系社会に関する知見を深めた。現地で出会った日系人の歩みや背景から得た気づきを生徒に伝えとともに、本校に在籍するルーツ生と日本人生徒の双方に対し、多文化共生の視点で「ともに考える時間」を創出したいと考えた。生徒一人ひとりが「自分のルーツ」や「身近な他者の背景」について考える契機とすることをねらいとしている。</p>	

3.対象と構成

対象は2学年2クラスで、それぞれ異なる観点から授業展開を行った。同じ学年同士で実施しなかったのは、時間割の都合によるものである。2年生「時事日本語」クラスでは、5時間をかけて自分のルーツを探求し、学校生活の中で今できることを考察した。3年生「ワールドスタディ」クラスでは、2時間の連続授業で多文化理解をテーマとした。前半は授業者による講義形式でスライド写真を用いてペルーを紹介し、その後、日系人に焦点を当てた。後半はルーツ生に参加してもらい、ルーツに関するスピーチや、ルーツを持つ生徒を受け入れる際に起こりうる状況をスキット形式で提示した。最後に「気づき」と「今後の自分の行動」について付箋を用いた共有活動を行い、考察と対話を深めた。

【指導観】

本授業実践に向けて、2つのクラスに対して異なる観点から準備を行った。

①ルーツ生のクラス(時事日本語)

このクラスでは、自分のルーツを掘り下げ、「自分をつくっているものは何か」を考えることを重視した。また、「自己紹介をするときに、どんな情報を伝えたと自分を表現できるか」を意識させ、自己表現力の育成を目的とした。多くのルーツ生は来日当初、日本語が十分に話せず、自己紹介の場で「出身国」と「名前」しか言えなかった経験を持つ。現在では日本語力が向上しているものの、自分のことを体系的に語る機会はほとんどない。そのため、自己紹介を通して自分を語る練習を重ね、自己開示のきっかけをつくることをねらいとした。当該生徒は現在2年生であり、今後も時間をかけて、卒業時には自分のルーツに誇りをもち、自分自身を客観的に見つめ、他者に伝える力を育てたいと考えている。

②日本人生徒のクラス(ワールドスタディ)

日本人生徒にとっては、同じ学校にいるルーツ生への理解を深める機会とした。普段から共に学んでいるにもかかわらず、互いを深く知るきっかけが少ない現状を踏まえ、この授業では、異なる文化や背景をもつ人への関心を高め、「自分の当たり前」を見つめ直し、目の前の人に関心を向ける学びの場とした。そのような気づきや対話を通して、生徒一人ひとりが「やさしい世界を自分たちの手でつくる」ための小さな一歩を踏み出すことを目指した。今回の気づきを中長期的な意識変容や態度変容へとつなげたいと考えている。

【4】展開計画(全2時間)

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1 ワールド スタディ	1 ペルーについて知る	①ペルーで撮影した写真をもとに、国の概要・文化・歴史を紹介し理解を深める ②紫トウモロコシを紹介し、紫トウモロコシを使用した飲料「チチャモラダ」の実飲を通して文化を体感する	・自作スライド ・乾燥した紫トウモロコシ ・チチャモラダ(飲料)
1~4 時事 日本語	1~4時 私を知る ルーツを掘り下げる	①「ルーツを見つめる活動」ワークを行い、自分とルーツ国・言語のつながりを視覚化する ②動画視聴後、感想・意見を交流し、背景や価値観の違いについて考えを深める ③「理想の自己紹介」を作成し、偏見をなくし自分を理解してもらうための伝え方を言語化する	・自作ワークシート ・動画Born with it

2 本時	2 日系人について知る ルーツについて考える 自分たちができる活 動を考える	①日系人について紹介し、移住の歴史・アイデンティ ティからルーツを捉え直す ②ルーツ生のスピーチを聞き、身近な仲間の背景を 理解する ③「これから自分たちにできること」をグループで考 え模造紙で共有・発表する ④本時の振り返りを行い、学びと今後の行動を言語化する	・自作スライド ・ルーツ生のスピーチの 翻訳原稿 ・模造紙と付箋
5 時事 日本語	日本人生徒の反応か らルーツ生が考える	①日本人生徒が書いた付箋を見て、ルーツ生として 今できる行動を考える ②日本人生徒と共に「おにぎりアクション」を行うこと を決定する ③取り組み内容を広めるためのポスターを作成する ④放課後の活動として「おにぎりアクション」を実施する	・ワールドスタディで作 成した模造紙 ・ポスター用紙
<p>※「おにぎりアクション」とは、認定NPO法人TABLE FOR TWOが行う社会貢献キャンペーンであり、おにぎりの写真をSNSや特設サイトに投稿すると、1枚につき寄付によってアフリカ・アジアの子どもたちの給食5食分が届けられる仕組みである。</p>			
[5]本時の展開			
過程 時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	ペルーにおける日系人に対して 理解を深める	①校内にいるルーツ生にも焦点を当て身近な背 景への理解を深める ②自分の意思ではなく国を移動することになった 経緯について知る ③受け入れ側の国・地域・人々の対応について考える ④メッセージ動画から読み取れることを共有し、感 じたこと・気づきを言語化する	・自作プリント ・自作スライド
(10分)	事例紹介1 ペルーで出会った日系人(城 間さん)の紹介		・動画
展開 (10分)	事例紹介2 同じ学校のルーツ生 (エルさん)のスピーチ 理想の自己紹介 ルーツ生(ミカさん)に今の日本 語力があればできる自己紹介 を発表	①ミックスルーツの生徒の話を、英語のスピーチ として聞く ②「ルーツとは何か」「国籍とは何か」「自分とは何 か」について考え、アイデンティティへの理解を 深める ③ルーツ生に、自己紹介の場面を想定した発表を 行ってもらう ④ルーツ生(移動してきた側)と受け入れ側(今回 は日本人生徒)の双方からの働きかけの大切さ について考える	・スピーチの日本 語訳 ・自作スライド
まとめ (10分)	私たちができることを考える 本時の振り返り	①この世界がより優しくなるために、自分たちに できることを考えて書く ②事前にルーツ生クラスで実施した同じ活動内容 を黒板に掲示し、参考にできるようにする ③「卒業までに」「5年後までに」「10年後までに」の 3つの時間軸を設定し、周囲と相談しながら考 えを深める ④それぞれの考えを黒板に貼りに来てもらいクラ ス全体で共有する ⑤授業のまとめとして、考察内容を Chromebookで提出する	・付箋 模造紙 ・ルーツ生の付箋 掲示 ・Chromebook

【授業実践の様子】



城間さんの動画紹介



エルさんのスピーチ



ミカさんの発表



ワーク前の説明



ルーツ生の意見



黒板に意見を貼っている様子

【6】本時の振り返り

本時は、日本人生徒を対象とした「ワールドスタディ」で実施した。本来授業者が担当する授業ではないため、生徒との関係性がない状態での授業となったが、異文化理解を入口としつつ、周りの生徒のルーツを理解し、他者への関わりを自分で考え学びを深めることをめざし、段階的に活動を構成した。

導入となる1時間目では、授業者がペルーで撮影した写真・動画・文化紹介をもとに授業を進め、食文化(チチャモラダ)の試飲を取り入れた。まずは「異文化理解は楽しい・興味深いものである」という感覚を生徒に持たせ、学びへの前向きな姿勢を引き出すことをねらいとした。

その後、日系人の歴史を確認したうえで、授業者がペルーで出会った日系人(JICAペルー事務所スタッフの城間シエリ氏)のライフヒストリーを紹介し、本人からの映像を視聴した。自分の意思とは関係なく国を移動せざるを得なかった経験、受け入れ社会で直面した困難、そして本人が語るメッセージに触れることで、ペルーという国の紹介から「そこに生きる人の物語」へと焦点を移し、異文化理解から他者理解へと学びを広げることが意図した。

続けて校内のルーツ生によるスピーチを聞き、生徒と同年代の当事者の語りを受け取った。英語での発表であったが字幕表示を併用することで理解を補助した。また、複数の国や文化にルーツを持つ生徒であったことから、「同じ学校に多様な背景を持つ仲間がいる」という事実を生徒自身が実感する機会となった。ルーツ生の語りを通して、「その人自身をどう受け止めるか」という視点を生徒に促した。続いて行った「理想の自己紹介」活動では、ルーツのみで人を判断するのではなく、「背景も個性も含めて、その人をまるごと見つめる」重要性について考える時間とした。

最後の付箋活動では、「この世界がより優しくなるために、今の自分にできること」を「卒業まで／5年後／10年後」の3つの時間軸で書き出したうえで、仲間と相談しながら黒板に貼り、クラス全体で共有した。短期・中期・長期の未来を描くことで、漠然とした共生の理想ではなく、自分の行動に落とし込む意識が育まれた。

本時の活動後、付箋の内容をルーツ生のクラス「時事日本語」にも持ち帰った。生徒の中から「実際に行動に移そう」という声が上がリ、企画化を進める動きにつながったことは、単なる知識理解にとどまらず、「行動を伴う学習への転換」が生まれた証であると言える。

【7】単元を通じた児童生徒の反応/変化

本授業では、生徒に対して

①ライフストーリーに関する気づき・学び

②付箋活動「世界を優しくする行動」を受けて考えたこと

について振り返りを求めた。それぞれの回答から、生徒の認識が **理解** → **共感** → **行動意欲** へと段階的に深まっていく様子を読み取れた。

①ライフストーリー(城間さん・エルさん)について

- ・自分たちが知らないところで一人で悩んでいる人もいるということを知って、躊躇なく自分のルーツを話せる環境を作って助けてあげたいと思いました。そのために自分をもっと多文化について学び、理解を深めることが大切なんだと実感しました。今日学んだことをもっとみんなに広めたいと思いました。
- ・どこで生まれたからといって何でもその国のことがわかるとかその言語を話せるとは限らないんだと知って決めつけでものを話すのには気をつけようと思いました。
- ・もっと日本以外の国のことについて知りたくなった。城間さんとエルさんのスピーチで自分の故郷がないという発言(授業者注:故郷と呼べるものがはっきりしておらず複雑だという趣旨の発言)がすごく心に残った。自分では気づけなかった思いや考えがあるんだとわかった。
- ・自分の意志ではなく、日本やペルーに行ったけれど、日本の文化もペルーの文化も知ることができたことを宝物と言っていて、マイナスに考えるのではなくそれを強みにしていることがすごく印象に残りました。
- ・何人?と聞くと相手を傷つけてしまうということがわかった。自分は本当に日本人なのかとも思った。自分のルーツに興味を持ついい機会になった。十人十色と言う言葉があるように、人間全員一緒ということはないんだと思いました。

コメントから読み取れる変化

- ・ルーツ生の経験を「知識」としてではなく当事者の感情や背景を伴う「物語」として受け取っている
- ・決めつけ・ステレオタイプへの自省が生まれている
- ・相手の背景を尊重しようとする価値観が芽生えている
- ・他者理解を「自分の学び・行動」に置き換えようとする芽生えが見られる

②付箋活動「世界を優しくする行動」について

- ・言語の壁を恐れてなんにもしないことが多かったが向こうもそのことを考えていた事を知れたのでこれからは少し積極的に行こうと思った。
- ・やっぱり誰でも自分から自分のことを話すのは難しいと思うのでできるだけ積極的に話しかけてみようと思いました。
- ・自分が普段あまり考えたり行動ができていないだけでもっと人のためになることができるんだと思った。色々なことを知ることで相手を傷つけるリスクが減るので色々な人や文化についてもっと知ろうと思った。
- ・自分一人が動いたところで何も変わらないと考えるのではなく、自分に何ができるか考えて行動することに意味があると思った。今日からルーツ生やバイト先の外国にルーツがある人に話しかけてみようと思った。
- ・せっかく海外にルーツを持った人たちが他の高校よりもいるので、この機会にたくさん声をかけたいなと思いました。文化の違いを聞けば聞くほど、その国の色みみたいなのが知れて面白いなと思いました。
- ・自分から積極的に関わりたいと思う。もし自分に子供ができたりして外国にルーツのある子と触れ合っているなら話を聞きたいし、子供にも日系人のことや外国に興味を持ってほしいなと思った。
- ・今まで言葉が通じないことが怖くて外国の方などに話しかけることはなかったけど、勇気を出して話しかけてみたらその人の不安を取り除けるのかなと思って行動しようと思った。

コメントから読み取れる変化

- ・「行動しない理由」から「行動する意義」へ認識が転換している
- ・多文化共生を抽象的理想ではなく「自分ができる行動」としてとらえ始めている
- ・助ける／理解する側という視点ではなく「対話的・相互的な関係性」をとらえようとしている
- ・未来の自分像(高校卒業後・仕事・家庭)へ学びを接続して考える姿が見られる

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】

「ワールドスタディ」のクラスでは、生徒の記述から 他者理解の深化 → 関係性への歩み寄り → 行動意欲の芽生えという変容が見られた。とりわけ、日常的に関わりのあったルーツ生に対し、より積極的に関わろうとする姿勢や、行動に移そうとする意欲が表れていた。

以下、生徒の感想の一部を示す(原文のまま)

- ・この授業を通して、多文化に関する理解が深まりました。多文化とは、異なる文化が共存し、お互いを尊重することです。言語や習慣などの違いを受け入れることで、社会はより豊かになります。私達は偏見をなくし、平和な社会を築くためにもっと頑張ります。
- ・エルは部活で関わってるのでこんなに頑張ってる姿を見て感動した。エルの心の中の悩みを色んな人に話すのは勇気いることなのに頑張っていた事に感動した。

これらの記述から、

- ・多文化理解が抽象的な知識としてではなく「自分たちがつくる社会のあり方」として捉えられている
 - ・ルーツ生の発表を「表面的なイベント」としてではなく「当事者の語り」として受け取っている
 - ・文化背景をもつ仲間に対し、より近づこう・関わろうとする意欲が見られる
- といった態度の変容が読み取れる。

さらに、ルーツ生側においても変容が生じた。

安全な環境で自己開示し受け入れられた経験を通して、「自分から関係性を築く一歩を踏み出したい」という意欲が高まった。その結果が「おにぎりアクション」という行動につながった。ルーツ生が主体となってポスターを作成し、日本人生徒に呼びかけ、放課後に活動が実施されるに至ったことは、学びが「理解」にとどまらず「行動」にまで発展したことを示している。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

(授業前)

授業前の段階では、海外にルーツをもつ生徒と日常的に同じ教室で学んでいるにもかかわらず、その関わりは表面的なものにとどまっていた。すぐそばにいる存在でありながら、背景やルーツに踏み込んで会話する機会はほとんどなく、生徒同士が互いの内面に目を向ける場面は少なかった。

同じ場所で過ごしていることが“当たり前”となっていたがゆえに、「それ以上深く知ろうとしない」状態が定着しており、異文化・多文化に関する学びが深まりにくい状況であった。つまり、生徒にとって“海外にルーツをもつ仲間”は身近である一方、その内側にある経験・感情・アイデンティティには触れずに生活してきたことが課題として存在していた。

(授業後)

授業後の生徒の振り返りからは、日系人のライフヒストリー、校内ルーツ生のスピーチ、付箋ワークを通して、生徒の意識が 理解 → 共感 → 行動意欲 へと発展していたことがうかがえた。「もう少し話してみよう」「自分から声をかけてみよう」といった感想が複数見られたことは象徴的であり、付箋ワークで時間軸を設定しながら自分にできる行動を考えたことが、単に理解を深めるだけでなく、一歩踏み出そうとする後押しにつながったと考えられる。

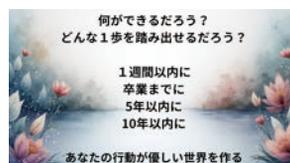
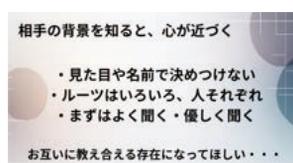
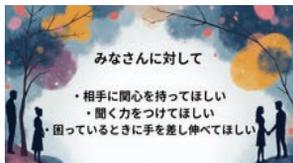
また、振り返りからは思い込みへの気づきと修正が多く表れていた。「ルーツはその人を説明するラベルではなく一部でしかない」「当たり前と思っていた接し方が相手を傷つけることもある」といった言葉に示されるように、生徒が無自覚に抱えていた固定観念に気づき、関わり方を見直そうとしていることが読み取れる。背景や経験の違いを知ることは、相手を特別視することでも距離を置くことでもなく、相手の気持ちを想像しながら関わるための視点を獲得することであるという理解が生まれつつある。

さらに、ペルー紹介の場面においては生徒の学習意欲が高く、「異文化を学ぶことは楽しい」「もっと知りたい」という言葉が見られた。多文化や異文化が「自分から遠いもの」「特別な存在」ではなく、自ら学びたい対象として捉え直されている点は、生徒の内的変容の深まりを示していると言える。

【8】自己評価	
1. 苦労した点	<p>本授業では、授業者と「ワールドスタディ」クラスの生徒の間に元々関係性がなかったため、安心して意見を表出できる雰囲気づくりに細心の配慮が必要であった。また、日系人やルーツ生の語りを取り扱うにあたり、「人の人生を題材とする学習」であることの繊細さを踏まえ、生徒が興味本位にならないよう、紹介の順序・言葉遣い・活動の流れを綿密に設計することが求められた。</p> <p>特にルーツ生が自己開示を行う場面では、本人の安心と尊厳を守りつつ、日本人生徒に気づきを促すという相反しうる要素のバランスを取ることに苦労した。</p>
2. 改善点	<p>今回は2時間という限られた時間の中で「知る → 聞く → 考える → 行動を考える」まで展開したため、生徒同士の対話の時間がやや短くなった。再実施の際は、①スピーチ視聴後の感情共有、②理想の自己紹介づくりにおけるペア対話、③付箋ワーク後のグループ対話など、相互交流の時間を増やすことで、さらに深い学びにつながると考える。</p> <p>また、教材として扱う映像・語りの種類を増やし、生徒自身の周囲に多様なルーツをもつ仲間が複数存在していることを示すことで、「特例の話」と捉えられず、社会的な構造として理解しやすくなると期待できる。</p> <p>さらに、付箋ワークでは卒業後・未来の視点だけでなく、「今、この学校でできること」に焦点を絞った活動として設計することで、より即時的な行動へとつながった可能性がある。</p>
3. 成果が出た点	<p>本授業によって、生徒は「海外にルーツをもつ仲間の存在を知っている」という段階から、「その背景や気持ちを想像し、自分の関わり方を変えたい」と考える段階へ進んだ。学びが知識の理解にとどまらず、態度・姿勢・価値観の変容へ広がった点が最大の成果である。</p> <p>また、「話しかけてみたい」「もう少し関わってみたい」という日本人生徒の声を受けて、ルーツ生の側からも「行動してみよう」という動きが自然に生まれた結果、ルーツ生の呼びかけによる国際支援企画「おにぎりアクション」の開催へと発展した。この出来事は、学びが「理解→共感→行動」へと確実に移行したことを示す象徴的な事例である。</p>
4. 備考	<p>授業者は日頃、ルーツ生の指導を中心に行なっているが、ルーツ生が一般生徒とどのように関わりを深めていくか、どのように安心して自己開示していけるかは継続的な課題である。その意味で今回のコラボ授業は、両者が互いを理解しながら関係性を築ききっかけとなり得るものであったと感じている。今後は一度きりの授業で終わるのではなく、学校文化として継続的に「互いの背景に耳を傾けられる関係性」を育てる仕組みを築き、多文化共生の教育を基盤から支える実践にしていきたい。</p>

添付資料:
スライド(一部)

<p>日系人の歴史</p> 	<p>日系社会の価値観</p> <p>尊敬 調和 誠実 信頼 連帯</p> <p>感謝 責任 忠実 根気 質素</p>	<p>日系校 訪問 ホセ・ガルベス校</p> 	<p>整理 整頓 清掃 清潔 躰</p> 
<p>城間シエリさんの ライフストーリーを聞いて</p> <p>国を移動することになった時 自分の意志はあったのか・・・</p>	<p>祖父母世代 おじいさん・おばあさん 沖縄出身 ↓ ペルーに 移民としてやってきた</p> <p>日本側の事情 ペルー側の事情</p> 	<p>両親世代</p> <p>ペルーで両親が誕生 ペルーで生活 日系校には行かず・日本語は日常会話のみ</p> <p>父：26歳 母21歳 日本へ「出稼ぎ」を決意</p>	<p>本人世代</p> <p>神奈川県で誕生 小学校まで日本で教育を受ける</p> <p>家庭内はスペイン語 学校では日本語・友達も日本人ばかり</p>
<p>2009年日本経済の悪化 家族が帰国を決断 ↓ ペルーで日系校に入学 読み書き×早い言葉も聞き取れない 辛い時期・日系人クラスに救われる</p>	<p>くろーばあ 2年生 ライフストーリー ローク エルさん</p> 	<p>国籍は？ フィリピン 両親の国籍は？ フィリピン 生まれた国は？ タイ 住んでいた国は？ タイ ミャンマー</p>	<p>住んでいる場所は？ 本人・両親：日本 祖父母：フィリピン</p> <p>両親が、親戚が話せる言語は？ 本人：英語・日本語 両親：タガログ語・英語 祖父母：タガログ語</p>



実施時の写真↑
おにぎりアクションチラシ→



ペルーについてのポスター展示

参考資料:

- ペルーの基礎データ(外務省): <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/peru/data.html>
- 細谷広美(編者)(2019)『ペルーを知るための66章【第2版】』(明石書店)
- ペルー日系人協会(APJ): <https://discovernikkei.org/ja/journal/author/apj/>
- 日系校 Colegio Peruano Japonés José Gálvez Egúsqiza:
https://www.facebook.com/photo/?fbid=1403079835159089&set=a.448445267289222&locale=es_LA

時事日本語で使用

- 短編映画: Born With It: <https://animoproduce.co.jp/products/52/>
- おにぎりアクション: <https://onigiri-action.com/>